

CORBEAU

ゲエテ詩集★新しい戀



田中克己譯

BUNDOSHA

ゲーテ詩集 新しい戀

田中克己 譯

美しい夜 (二七六七年)

いま僕は戀人のすみかなる

この小屋を立ち去つて

忍び足でさびしい

くらい森をさまよつてゐる

月よみが灌木と

榊の葉かけをもれて来る

西風は月よみのおとづれをしらし

樺の木は頭をたれて月よみに
あまいかほりをふりかけてゐる

この美しい夏の夜のすすしさに

僕はなんとたのしいことだ

心をしあはせにするものを

感じるためになんとこのしづかなことだ

大喜びで我慢が出来ないほどだ――

でも天よ、こひびとが一夜さを

僕に與へてくれさへすれば

こんな夜は千夜でもさしあげますよ。

生きてゐる記念品 (一七六七年)

半ば怒らせ半ばは承知させて

こひびとのリボンや蝶形結びをとるのは

おまへたちには大事なことでらうから

そんなうぬぼれをよろこんで許してやる

ヴェールや首巻や靴下どめや指環は

ほんとにつまらぬものではないが

それだけでは僕には十分ぢやない

こひびとの生命のしかも生きた一部分

それをちよつとした抵抗のあとで

彼女が僕にくれたので

まへの立派なものはねうちがなくなつた
がらくた類はおかしくなつた――

彼女は僕に一等うつくしい顔の

飾りである美しい髪を贈つてくれたのだ

こひびとよ、たとへ僕がすぐにおまへを失ふことがあらうとも
もうおまへは全部もつてゆくことはない

見るため、じやれるため、キッスするため

おまへの聖なる記念品がのこつてゐる――

この髪と僕の運命とは同じなのだ

われわれはこれまでは彼女をめぐつて

幸福を争つて來たがいまはもう彼女と別れた

われわれはしかと彼女に寄りそつて

その圓い頬をなで

あまいのぞみに誘はれて

ふくらんだ胸へとすべつて行つた

おお、嫉妬をしらぬ競争者よ

あまい贈り物よ、美しい獲物よ

幸せとよろこびとを僕に思ひ出させておくれ。

離れてゐるここの幸せ (一七六七年)

若者よ、一日ちうこひびとのまなざしから

聖なるしあはせをのみたまへ

夕方には彼女のすがたがちらちらと寄つて來やう

こひするものにとつてこれよりいいことはない

しかしこひびとから離れてゐると

しあはせはいつも二層大きいのだ

時間と距離といふ永遠の力が

星辰の力のやうにこつそりと

この血潮をゆすぶつて休ませてくれる

僕の感情は次第にやはらいでゆく

しかし僕の心は日毎に輕やかになり

僕のしあはせは増してゆくばかりだ

どこへ行つても彼女を忘れることは出來ない

しかも落着いて食事が出來て

精神は快活で自由である

そして目に見えぬまやかしで

愛は崇敬にかはり

欲望は狂信にかはるのだ

太陽にはぐくまれた

エーテルのやうな喜びの空氣の中には

こよなく軽い小雲さへ漂はないが

これこそ安らひと喜びの中にある僕の心のありさまだ

恐れからはなたれ、ねたむには寛大すぎ

僕は愛する、彼女を永遠に愛する。

意味わるい喜び (二七六七年—六九年)

最後の一息を吸うたあと

僕は蝶に姿をかへ

牧場のうへ、泉のほとり

丘のまはり、森の中と

天國のやうな幸を見聞きしてくれた

大好きな場所へ飛んでゆく

僕は愛しあふ一組の男女の話をぬすみ聞く
美しい少女の頭の

花環にとまつて見下す

死のおかげで僕から奪はれたものがすべて
ここではまた姿をあらはして見えて來るので
僕はむかしのやうに幸せた

少女はほほえみながら無言で男を抱きしめ
男の口は親切な神々が

贈りたまうた時をたのしんで
胸から口へ

口から手へとびまはる

僕はまたそのまはりをとびまはる

そして少女に蝶になつて僕を見る

男の熱望にふるへあがつて

彼女はとび上る、そこで僕は遠くへ逃げる

「こひびとよ、ねえあれをつかまへに行きませう
ねえ、あたしは小さい色のきれいなものが
ほんとにとてもほしいんですもの。」

ジブシー調の唄 (二七七二年)

霧の立ちこめた中、深い雪の中

荒れた森の中で冬の夜に

狼の飢えた叫びを聞いた

梟の叫びを聞いた

ヴィレ ヴァウ ヴァウ ヴァウ

ヴィレ ヴォ ヴォ ヴォ

ヴィト フ

ある時わしは垣根の猫を射ち殺した

魔女のアンネのかあいがつてた黒猫だつた

その夜七匹の人狼がやつて來た

村の七人の、七人の娘の化けたやつだつた

ヴィレ ヴァウ ヴァウ ヴァウ

ヴィレ ヴォ ヴォ ヴォ

ヴィト フ

わしは彼女らをみな知つてゐた、よく知つてゐた

アンネ、ウルゼル、ケーデ

リーゼ、バルベ、エヴァ、ベート

みんな環になつてわしに吼えかかつた

ヴィレ ヴァウ ヴァウ ヴァウ ヴァウ

ヴィレ ヴォ ヴォ ヴォ ヴォ

ヴィト フ

そこでわしは大聲でみんなの名をいつてやつた

「アンネどうする氣だ、ベーターどうするつもりだ」
すると彼女らは身をふるはして

そこから逃げ出して吼えよつた

ヴィレ ヴァウ ヴァウ ヴァウ ヴァウ

ヴィレ ヴォ ヴォ ヴォ ヴォ

ヴィト フ

堇

(一七七三年)

野邊に堇がうなだれて

人に知られず立つてゐた

かあいい堇だつた

そこへわかい羊飼ひ女がやつて來た

軽い足どり、陽氣な心で

こちらへ、こちらへ

野邊を來たから歌つてゐた

堇は考へた「ああ僕が

天然の一等美しい花だつたら

ああ、ほんのちよつとのま

こひびとが僕を摘んでくれて

胸におしつけてくれるまで

ああ、ほんの

十五分間だけでも美しかつたら」

ああ、けれど氣の毒だ、むすめは來たが

堇のことなど氣にとめず

かあいさうな堇をふみにじつた

仆れて死んだがなほよろこんだ

「これで死ぬけどあの子のおかげだ

あの子のおかげで

あの子の足にふまれて死ぬんだもの。」

不實な若者（二七七四年）

むかしたつぷりあつかましい若者がゐた
ちやうどフランスから來たばかりで

かあいさうな若い娘を

たびたび腕に抱いてやり

撫でてやつたり抱きしめたり

花婿のやうにふざけてから

たうとう見捨ててしまつた

茶色の髪の毛はそれがわかると

氣をうしなつて笑つたり

泣いたり祈つたり誓つたりして

魂魄あの世のものとなる

むすめの臨終のその時刻

若者はゾツとして髪がさかだち

馬にのつて出て行つた

拍車をやたらにあて

四方八方のりまはし

あちらこちらここかしこ

休むひまもとれなかつた

七日七晩、駆けてゐた

稲光りがし雷が鳴り嵐になり

メリ／＼いひ大洪水となつた

稻光りををかし

とある家を目指して馬をやり
馬を戸外につないで這ひこみ

雨をよけてうづくまつた

手さぐり足さぐりすると

足もとの地面がめりこんで

百尋ばかりも落つこちた

この打撃から正氣をとりもどすと

三つのあかりがしのび寄るのが見えた

これで元氣づいて這つてゆくと

あかりは遠のいて

たてよこすじかひと迷はしみちびく

階段を上らせ下らせ狭い廊下

こはれた荒れた穴倉へと

にはかに若者は廣間に來た

百人ものお客の坐つてるのが見える

凹んだ眼で一齊に齒をむき出して

宴會に出るやうにと目くばせする

白い經帷子かたびら着た

彼の色女もその中にをり

彼女はこちらへふりむいた――

トゥーレの王 (二七七四年)

むかしトゥーレに王がゐた

死ぬまで心がはりしなかつた

王の戀びとが死にぎはに

金の盃を王に與へたのだつた

これより大切なものはなく

宴うたげごとにこれで乾杯した

そしてこの杯から飲むときは

王はよく眼をばうるませた

王の死にゆくまぎはには

國中の町をかぞへ立て

なにもかも世子に與へたが

この杯だけはやらなかつた

そこの海邊の城の

先祖代々の大廣間で

騎士どもをまはりに集めて

王は宴のまん中に坐した

老いた酒好きの王は立ち上り

命の最後の火をのみほして

聖なる杯を投げこんた

お城の下如潮の中へ

杯が落ちてゆき水をのんで

海底ふかく沈んでゆくのを見た

王の兩眼もぐつとくぼみ

もう一雫も飲まなかつた

す　く　ひ　（二七七五年）

僕のこひびとが心變りした

それで僕は遊びがきらひになつた

そこで流れる川邊にゆくと

水は僕の眼の前を走つてゐた

絶望してだまりこくつて立つてゐると

頭の中はまるで酔つばらつてゐるやうだつた

流れにもう身を投げたいほどで

大地が一緒にぐるぐるまはつた

突然、僕は叫びこゑを聞いた

ちやうどその方へと向きなほつた――

ほれぼれするやうなこゑだつた

「お氣をつけないね、流れは深いのよ」

そこで體ぢうの血をゾツとさして

見るとかあいいをとめたつた

僕はたづねた「何て名前」、「ケートヘン」――

「おお美しいケートヘン、きみは親切な

きみは僕を死ぬことから救つてくれた

生涯いつもいつも恩に着るよ

でもそれだけちやすまない

今から僕の生涯の喜びになつておくれ」

それから僕は苦しみを訴へた

彼女はかあい目伏せた

僕がキッスするとしかへしてくれた

そして——死ぬことなんか消し飛んだ。

新しい戀、新しい生（二七七五年）

心よ、僕の心よ、どうしたことだ

何にこんなにひどく悩まされてるのだ

なんとかはつた新しい生よ

もうおまへの姿は見おぼえがない

おまへの愛したものはすべて消えてしまつた

おまへを悲しませる理由となつたものは消えてしまつた

おまへの努力もおまへの休息も消えてしまつた——

ああどうしてこんなになつたのだ

無限の力で

おまへをつなぎとめるのは若々しい花のすがたか

このかあいいすがたか

まごころとよさにみちたまなざしか

僕はすばやく彼女からのがれ

勇氣を出して逃げようとするが

たちまちにして僕のみちは

ああまでも彼女へともどつてゆく

そして斷つことをさせない

この魔法の糸で

かあいゝいたづらつこのをとめは

僕を意志に反してしつかとつなぎとめる

彼女の魔法の環の中で

いまやその思ひのままに僕は生きねばならない

ああなんと大きな變りやうだ

戀よ、戀よ、僕をとき放してくれ

若きヴェルテルのなやみから (一七七五年)

青年はみなかく愛せんとあこがれ

をとめたちはみなかく愛せられんとあこがれる

ああわれらの衝動のうち最も神聖なものよ

なぜはげしい苦しみがそれから湧くのだらう

戀するものよ、おまへは彼のために泣き、彼を愛し

彼の記憶を恥辱から救ふ

見よ、彼の靈は奥津城からおまへに目くばせする
「男であれ、されどわれに倣ふな」と。

山から（一七七五年）

愛するリリよ、もし僕がおまへを愛してなければ

この眺めも僕になんの喜びを與へるものか

それからまたリリよ、もし僕がおまへを愛してなければ

僕はここでもあすこでも幸せなぞ見つけることがあるものか。

クリステル（一七七六年）

僕はよく暗い悲しい氣持になる

全く苦しい氣分である

僕のクリステルのそばにゆくと

何もかもふたたびよくなるのだ

彼女をあすこで見、ここで見ながら

僕には一向わからない

どうしてどこでまたいつの日に

なぜに彼女が氣に入つたのか

黒いいたづらつ子らしい眼と

そのうへの黒い眉

それを一度でも見ると

僕の心ははればれする

こんなかあいい口と

かあいい丸い頬とをもつたひとがあるだらうか

ああまだ丸いものがある

これにはどの眼も見あきることがない

それから輕やかなドイツの踊りで

彼女をつかまへることが出来たら

ぐるぐるまはりきびきびまはり

僕は不足を感じない

彼女がよろめき上氣すると

僕はすぐこの胸とこの腕に

彼女を抱いてゆすぶつてやる

まるで王様のやうな氣持になる

それから彼女が僕を好いてながめ

なにもかもすっかり忘れてくれたところで

僕の胸にだきしめ

心ゆくばかり一つキッスすれば

脊髄から足の親ゆびまで

ぞつとする

僕はとても弱く、とても強い

とても楽しく、とてもかなしい

そこでのぞみは一層つよくなるばかりで

一日が長くなる

夜も彼女のそばにをられたら

夜の不安もなくならうに

僕は考へる、彼女を一度ひきとめて

僕らのぞみを満したいと

それでもなやみが消えなければ

彼女の胸にもたれて死んでやらう。

旅人の夜の歌 (二七七六年)

天から降りて来て

なやみと苦しみをすべてをしづめるひとよ

ひとの二倍ふしあはせな男を

二倍になぐさめてくれるひとよ

ああ、僕は世の営みに疲れてゐる

なやみとたのしみなぞみな何にならう

甘い平安よ

來てくれ、ああ、僕の胸に來てくれ。

狩人の夕の歌（二七七六年）

銃の撃鉄をあげ

しづかにしかし殘忍に野をわしは忍んでゆく

そのときひどく明るくおまへのかあいい姿が

おまへの甘い姿が眼のまへに浮んで來る

おまへはいましたしづかにやさしく

野をこえ好きな谷をこえてさまよつてゐるのだ

そしてああ、わしの急いでゆく姿は

おまへの眼のまへには浮ばないのか

おまへに別れたため

不機嫌と不満とにみちて

東へ西へとさまよひ

世界ちうをさまよひあるく男の姿

おまへのことだけを思ふと

月を仰ぐやうな氣がする

しづかな平安が寄つて來る

どうなつたのかもわからない

ミニョン (一七七七—九六年)

あなたはその國を知つてゐるか、シトロンの花咲き

くらい葉かけに金のオレンジの輝き

やさしい風が青空から吹いて來て

桃金娘木はしづかに月桂樹は高くそびえてゐる國を

あなたはその國のことをよく知つてゐるか

そこへ、そこへ

あなたといつしよに、おお、こひびとよ、行かう

あなたはその家を知つてゐるか、屋根は圓柱に支へられ

廣間はピカピカ光り、小さい間もかがやき

大理石の像が立つてゐて私をみつめてゐる

「あはれな子よ、おまへはどうしたのだ」と

あなたはその家のことをよく知つてゐるか

そこへ、そこへ

いつしよに、おお、主とたのむひとよ、行かう

あの山と雲の^{かみはし}棧とをご存じか

驃馬は霧の中に道をもとめ

洞穴には龍の古い種族が住んでゐて

巖はころげおちそのうへに瀧のそそぐ山を

その山のことをよくご存じか

そこへ、そこへ

道は通つてゐる、おお父なる人よ、いつしよに行かう。

語るなといひたまへ、黙れといひたまへ

秘密を守るのが私のつとめだから

あなたに心中をすっかり打明けたいが

私の運命はしかしそれを欲しない

ちやうどその時と太陽の運行が

くらい夜を追ひ拂つて明るくなるにちがひない

堅い岩はそのふところをあけ

地は深く秘めてゐる泉を惜まない

みなみな友の腕に慰ひを求めてゐる

そこでこそ嘆く胸がなげきをもらすことが出来る

ただ私の唇だけは誓ひがとちてゐて

これを聞くことの出来るのは神さまだけだ

あこがれを知つてゐる人だけが

私のなやんでゐることを知つてゐる

ただひとり

すべてのよろこびから引きはなされて

あなたの

蒼穹を私は眺めてゐる

ああ、私を愛し知つてくれる人は

はるかな國にゐる

眼はくるめき

はらわたは煮えくりかへる

あこがれを知つてゐる人だけが

私のなやんでゐることを知つてゐる。

私が天使となるまで、このまま天使の姿にしておいて頂戴

白い衣をぬがさないで頂戴

私はこの美しい地上から

あの堅い奥津城へいそいで下りてゆくのです

奥津城でちよつとの間やすんでから

私は新しく眼を開くのよ

そのときには清い衣も帯も

冠をもぬいでゆくのよ

そしてあの天國の方々は

男か女か問はないし

着物は一枚だつて

きよめた體にはまとはないのよ

私はほんとに心配やつらさ知らずにくらしただけれど

それでも深い苦しみを十分感じたわ

うれひで私は早く年老いたわ

も一度永久に若くして下さいね。

フィリーネ (一七七七年?)

夜のさびしさで

悲しい調子で歌ひたまうな

ほんとだ、美しいひとよ

さびしいからこそひとはむつみあふのだもの

女が男にとつて

一番美しい半分であるやうに

夜は生の半分で

とりわけ一番美しい半分だ

よろこびをさまたげるだけの

晝がうれしがるかね

うさばらし出来るのはよいが

そのほかのことには晝は役立たない

しかし夜の時刻となつて

あまいランプがほのかにつくと

口から口へと

たはことも戀もたつぷりと

ふだんはがさつで熱中していそぐ

せかせかしたたよりない戀の使者の子供も

ちよつとした祝儀で

ほんの遊びにでもよく立ちどまるとき

夜鶯がこひびとたちに

こひしげな歌をうたつてやり

とらへられて迷はされたものが

ただため息となげきごとをもらすとき

どんなに軽やかな胸のときめきで

おまへたちは十二のゆつくり鳴る音で

休息と安全とを約束する

時の鐘を聞かないだらうか

それゆゑ永い晝間に

こひびとよ忘れるな

晝にはいつも苦しみがあり

夜はたのしみをもつことを。

法 廷 で (二七七八年)

おなかの中の子を

どなたからいただいたかは申し上げませぬ

プイと唾をおはきになりますね、賣女^{ばいど}めと

でもあたしはちゃんとした女です

誰とねんごろにしたか、それは申し上げませぬ
あたしのいいひとはかあいい善いひとです

首に金の鎖をつけてませうとも

藁の帽子をかぶつてませうとも

嘲りやあなどりを忍ばねばならぬなら

あたしひとりで悪口を辛抱しますわ

あたしはあのひとを、あのひとはあたしをよく知つてます

神様もそのことは御存知です

牧師さま、お役人さま

どうぞあたしを放つておいて下さいまし

これはあたしの子です、いつまでもあたしの子です

みなさま方はそのうへどうもお出来になれませぬ。

譯者のことば

ゲーテは今を去る二百年前の一七四九年八月二十八日フランクフルト・アム・マインに生れた。詩を作り出したのは、十五歳の時のことである。この時の作は試作の域を脱しなかつたが、一七六五年にライプチヒの大學へ入つて父母や生れ放郷とはなれてからは、詩もだんだんと一人前になつて來た。のちに「ヴェテルの惱み」のモデルとなつたケートヘンとの戀愛はその翌六年、別れたのが翌年の三月、これが刺激となつてか、いい詩はこの頃から始まる。詩作がその後、一生を通じて止まないと同じく、戀愛も相手は變るが、たえずやまない。ストラスブルグのフリーデリケ、故郷の市のアンナ

などと戀の相手はみなその詩にあらはれてゐやう。「ヴェルテル」を書いた一七七五年にはリリ・シェーネマンと婚約したが、すぐ破約し、ワイマル公に招かれて、その地をこののちの働く場所とすることになり、スタール夫人とも相見えた(一七七五年)。ここに收めたのはゲーテの二十代の詩の中、譯者の最も好むもの二十一篇である。ゲーテ生誕二百年を詩人としてこんな形で祝ふことが出来たのは、私にとつてこよない喜びである。機會を與へられた天野忠、山前實治の二友に深く感謝する。(一九四九・八・二八)。

目次

美しい夜	3
生きてゐる記念品	5
離れてゐることの幸せ	8
意地わるい喜び	11
ジプシー調の唄	14
董	17
不實な若者	19
トゥーレの王	24
すくひ	27

新しい戀、新しい生	30
若きヴェルテルのなやみから	33
山 か ら	34
クリステル	35
旅人の夜の歌	39
狩人の夕の歌	40
ミニョン(四首)	42
フィリーネ	49
法 廷 で	53
譯者のことば	56

世の中には、三つ良い事がある。
第一は詩を読むこと、第二は詩を
作ること、第三の一番良いことは
詩を生きたることである。

ラバート・ブルウクの言葉

¥ 30

コルボウシリーズ 1

昭和二十四年十一月一日印刷
昭和二十四年十一月五日發行

譯者 田 中 克 己

發行者 山 前 實 治
京都市東山区大和大路通
五條下南梅屋町

印刷者 河 北 喜 四 良
京都市中京區三條通堺町東入

版元 文 童 社
京都市東山区大和大
路通五條下南梅屋町

コルボウシリーズ (續刊豫定)

現代詩鑑賞

(教材の詩を中心とするもの)

コルボウ詩話會編

詩集 小 牧 歌

天 野 忠著

詩集 幻の汽車

安藤眞澄著

ワーズワース詩集

兒玉實用譯

詩集 旅の詩集

天野隆一著

詩集 斷 簡

半井康次郎著

詩集 餘 映

佐々木邦彦著

詩集 ベーリングの齒人

城 小 碓著

詩集 秘 園

依 青 茅著

詩集 未 定

大西卯一郎著

詩集 飛驒山脈

山前實治著

